慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済名著解題 一千八百八十三年版ヘンリィ・ シヂウィック著 経済原論
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.1 (1940. 1) ,p.103(103)- 121(121)
JaLC DOI	10.14991/001.19400101-0103
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400101-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟名著解題

一千八百八十三年版ヘンリィ・シヂウィック著『經濟原論』

高橋誠一郎

一

茲には第十九世紀後半に於ける劍橋思想の主要なる代表者(ヘンリィ・シヂウィック(Henry Sidgwick)が經濟學界に殘せる名著『經濟原論』(The Principles of Political Economy, 1883.)に就いて述ぶることゝする。

シヂウィックは、一千八百三十八年五月三十一日を以つて、英國ヨークシャ郡ウェスト・ライヂング區スケプトン町に生れた。彼れの父ウィリアム・シヂウィック師(Rev. William Sidgwick)は此の町の文法學校長を勤めて居つた。彼れはウィリアムと其の妻メリィ(Mary Crofts)との間に生れた第三男であつて、一千八百四十九年ブラックヒース學校に入學し、次いで同五十二年ラグビィ校に學んだ。彼れは愛書の少年であつて、フットボールにもクリッケットにも興味を有することなく、只管、當時同校の教師であつた其の從兄ベンソン(Edward White Benson 後のカンタベリィ大監督)の如き卓越せる學者たらんことを期した。彼れは首席奬學金受領者の榮譽を荷つてラグビ

イ校を去り、一千八百五十五年十月劍橋大學ツリニティ・コレッヂに入學した。彼れは一千八百五十六年にはベル(Bell)奬學金、五十七年にはクレーヴン(Craven)奬學金、五十八年には希臘短唱詩賞を獲得し、五十九年には同大學古典優等試驗首席及第者(Senior Classic)、名譽總長賞牌首席受領者(Senior Chancellor's Medallist)並びに第三十三位數學學位試驗一級及第者(Wrangler)であつた。一千八百五十九年十月ツリニティ・コレッヂ校友に擧げられ、二十一歳の若年を以つて大學學生指導助手の職に其の身を落ち着けた。

初め彼れは古典文學の講師を勤めたが、一千八百六十七年に倫理科學の講師に轉じ、劍橋に一個の哲學派を創設するの業に從事せんことを決意するに至つた。宣誓廢止法通過の二年前、即ち一千八百六十九年十月、當時行はれて居つた宗教上の宣誓に關して疑惑を抱き、「教義上の義務より自己を釋放するが爲めに」ツリニティ・コレッヂに於ける校友の地位と學生指導助手の職を辭したが、講師の職は依然之れを保持し、斯くて又、其の收入は著しく減少を來したのであるが、而も、劍橋に於ける其の仕事を繼續することが出來た。彼れは一千八百七十二年、モーリス(Frederick Denison Maurice)の死後、ナイトブリッヂ教授たらんとして成功しなかつたが、一千八百七十五年、ツリニティ・コレッヂに於ける倫理及び政治哲學の講演者(Praelector)に擧げられ、一千八百八十三年に至つて漸く、モーリスの後繼者バークス(Birks)の死後空位と爲れる倫理哲學ナイトブリッヂ教授(Knightbridge Professor)と爲り、死去の數個月前まで其の職を去ることがなかつた。彼れは又、八十一年、ツリニティ・コレッヂの名譽校友に特選せられ、次いで八十五年に通常校友に再選せられた。

彼れは劍橋に於ける其の四十五年間の在住を通じて大學の方針の進歩及び哲學的研究發達の上に深甚なる影響を及ぼした。彼れは一千八百七十七年の大學委員會(University Commission)によつて構成せられたる條例の一千八百八十二年に於ける施行に次げる大學改造の指導者の一人であり、英國教會の信仰箇條の承認が大學に於ける完全なる資格を備へたる成員たるが爲めに必要ならしめたる大學に於ける宣誓の廢止運動に際して大なる役割を演じた。彼れは又、一千八百七十五年女子教育の目的を以つて劍橋の郊外に建設せられたニューンアム・コレッヂ(Newnham College)の創立を促進するが爲めに多大なる援助を與へ、又、一千八百八十一年以後、同コレッヂ及び同じく女子教育の爲めに一千八百六十九年に劍橋附近のガートンに設立せられたガートン・コレッヂ(Girton College)の學生が劍橋大學の文藝得業士の試驗を受け、及第者等級表(class-list)に於ける其の順位を示せる證明書を收受するの資格を有するに至つたことは彼れの盡力に負ふ所が大であつた。彼れは一千八百七十六年、第二代のソールスベリ侯爵(Marquis of Salisbury)の孫であり、後に首相と爲つたアーサー・ジェームズ・バルフォア(Right Hon. Arthur James Balfour)の妹であるエレアノア・マイルドレッド・バルフォア(Eleanor Mildred Balfour)と結婚したが、彼の女はニューンアム・コレッヂの初代校長クラッフ孃(Miss Ann Jemima Clough)の下に副校長を勤め、一千八百九十二年同孃の死後、其の後を襲つて校長(Principal)と爲り、彼れ等夫妻は同コレッヂ内に居住した。彼れは一千八百八十二年より九十九年に亙つて劍橋大學の研究總委員會に在つて努力し、暫く其の幹事をも勤め、又一千八百九十年より同九十八年に亙つて大學政策の大發條たる評議員會(Council of the Senate)の一員であつた。然しながら、彼れの主たる關心事は、一千八百五十一年に創始せられ、同六十年に學位に對する條件と爲つた同大學の哲學的課程たる倫理科學優等試驗(Moral Sciences Tripos)に存した。彼れは之れが爲めに試驗し、之れが爲めに講義した、而して彼れは一千八百八十三年より一千九百年に亙つて倫敦哲學ナイトブリッヂ教授として親しく其の發達に與つた。彼れは多數の傑出した弟子を有して居つた。バルフォア卿やバートランド・ラッセル(Bertrand Russell)は其の中に

數へられる。

彼れは又持續的個人的存在の直接證左は道德に取つて重要であると云ふ理由に基き、早くよりして、心靈現象の研究に深き興味を有し、心靈研究協會(Society for Psychical Research)の創設に與り、一千八百八十二年、其の最初の會長と爲つた。彼れが大なる興味を有して居つた他の事項は私的慈善の組織であつて、劍橋慈善團協會(Cambridge Charity Organisation Society)の形成は主として彼れの首唱に由れるものである。彼れは一千九百年八月二十八日を以つて有名なる物理學者にして其の義兄弟たるレーリィ卿(John William Strutt Rayleigh)の邸宅に於いて逝去した。彼れの弟アーサー・シヂウィック(Arthur Sidgwick)も亦、古典學者及び教育家として有名である。一千九百〇六年に彼れ及び未亡人の共著に成る六百三十三頁の Henry Sidgwick: a Memoir. が倫敦のマクミラン會社から出版せられてゐる。

シヂウィックの著書としては吾人が玆に紹介せんとする『經濟原論』の外、The Ethics of Conformity and Subscription, 1871. The Methods of Ethics, 1874. The Scope and Method of Economic Science, 1885. Outlines of the History of Ethics, For English Readers, 1886. The Elements of Politics, 1891. Practical Ethics. A collection of addresses and essays, 1898. Philosophy, its scope and relations: an introductory course of lectures, 1902. Lectures on the Ethics of T. H. Green, Mr. Herbert Spencer, and J. Martineau, 1902. The Development of European Polity, 1903. Miscellaneous Essays and Addresses, 1904. Lectures on the Philosophy of Kant and other Philosophical Lectures and Essays, 1905. がある。

II

シヂウィックと同時代の牛津哲學者トーマス・ヒル・グリーン(Thomas Hill Green)が其の哲學をプラトーン及びアリストテレース並びに獨逸觀念論者に基かしめ、英國の傳統的學流たる經驗論、自然主義に反對し、批判的觀念論に立脚せるに反し、彼れはジョン・スチュアート・ミルの教旨によつて多大なる影響を受け、其の哲學を英國流の功利主義の上に打ち建てた。彼れはあらゆる形態の超絶哲學に反對して、英國流の常識の傳統と愼重なる實在論に從つた。彼れの一千八百七十四年の著『倫理學の諸方法』は功利主義的理論を直觀主義的理論とを和解せしめんことを企圖せるものであつて、正しく了解せらるゝならば、バトラァとカントとは、ミルの如く一般的幸福を其の軌準と爲す倫理に對して合理的基礎を供給するを得可きことを示さんとするに在る。形而上學者としてのシヂウィックの一般的態度は批判的であり、消極的であつて、カント及び超絶學派に對する彼れの特殊の反抗的態度は前掲彼れの死後一千九百〇五年に出版せられた講演中に示されてゐる。

經濟學者としての彼れは、單に直接のみならず、他の思想界よりの反射によつても亦、斯學の上に光を投じたる人として記憶せらる可きである。就中、彼れが「經濟の術」と呼んだ其の『原論』第三編は彼れの倫理哲學に負ふ所多きものである。彼れの著作中に在つて最初の重要なるものであり、又大體より觀て彼れの最大なる著作である『倫理學の諸方法』からして、分配的正義の原理は、そが最大幸福の優越原理によつて感悟せらるゝに非ざれば、何等明確なる指導を與ふることなしと論斷せらるゝ辯證法が借用せられた。彼れの一千八百八十三年の著『經濟原論』は彼れの社會問題に對する關心の所產であつた。彼れは鋭敏なる批判に依つて舊古典的經濟學の過度の硬直性を排除せんことを努むると共に、他方に於いては又、そが社會改革家によつて考察せらるゝの要ある著しく確實なる推理を含蓄することを明かにせんとした。彼れの自然的傾向は明白なる總べてのものを疑ひ、而してあらゆる承認せられ

たる教理中に缺點を發見するに在つたと言はれてゐる。（James Bryce, Studies in Contemporary Biography, 1903, ch. xv.）。又、彼れが實際問題を論ずるの力を有して居つたとは彼れが英蘭及び愛蘭の財政關係に關して財政關係委員會（Financial Relations Commission）に答申せる覺書（Memoranda）其の他によつて明かにせられてゐる。

三

シヂウィックは彼れの『經濟原論』の結論に於いて經濟學の對象及び方法を論ずる。經濟學は「何であるか」に關するものであるか、又は「何である可きか」に關するものであるか。其の目的は諸事實の共在及び續發に關する確實に眞なるか若しくは假設的に眞なる或る一般命題を確立するに存するか、又は政治家及び實業家の職務上の行動を指導するが爲めの實際的準則を與ふるに在るか。略言すれば、そは「學」であるか、若しくは「術」であるか。本來、そは「術」として認められ、又、アダム・スミスによつて「術」として定義せられたのであるが、而も、スミスの教理の本質は必然的に彼れの說明をして主として科學の共れならしめたのである。而も猶ほ、英國の經濟學は、そが縱令ひ如何なる語調に於いて說明せられたにせよ、概して「自由放任」の主張を包含したことは事實である。而して其の說明者は啻だに外國貿易の問題に於いてのみならず、更らに深刻にして更らに焦眉の問題たる賃銀の共れを取り扱ふに當つても、概して、勤務の報酬が各々、努力、制欲若しくは他の犧牲の一定高に對して最大なる貨幣上の利得を取得せんことを企圖しつゝある人々の間に於ける自由契約に依存する限り、之れを決定する諸法則を探求するに止らずして、彼れ等は又、大概、法律若しくは輿論の孰れかに依つて之れと相異れるあらゆる富の分配を行はしめんとする總べての企圖に反對した。「自由放任」の教理は實に「術」に屬するものである。而して、生產部門に於いては「何であるか」と「何である可きか」との間の區別は常に分配部門に於けるが如く明確に劃さるゝことがなかつた。シヂウィックは本書中に於いては、經濟上の事項に於ける適當なる政治的干涉に關する總べての問題を「經濟術」に關する問題として其の最終編たる第三編に於いて別箇に論じようとしたのである。（The Principles of Political Economy, ed. 1883, pp. 12-29.）。

シヂウィックは、經濟學の適正なる方法が概して斯學の部門若しくは方面によつて異なるものと觀た。而して彼れは、生產理論の普通の論述に於いては、演繹的要素は必然從屬的であると主張した。然しながら、分配及び交換の根本的法則の決定に取つては、演繹的及び假設的方法が概して適正なることを固執した。而も、彼れは之れと同時に經濟法則を具體的の場合に適用するに際しては、明かに歸納の援助を要することを認めたのである。（ibid., pp. 30-38.）。

四

彼れは其の著の第一編を生產論に當てる。同編中に於いて論述せらる可き根本的問題は、如何なる條件の下に於いて、又、如何なる法則の作用に依つて、一國民は富裕の度を增加し若しくは減少することゝ爲るかである。（ibid., p. 49.）。而して彼れを以つて觀れば、數量的正確性を以つて富の總念を使用するが爲めには、吾人は富の尺度、從つて又、價値の尺度に關する明晰なる見解を必要とする。交換價値の總念を正確ならしむるに際し、主たる困難は價値變化の尺度を看出すに存する。蓋し、勞働はリカードオの意味に於いても、又アダム・スミスの共れに於いても、吾人の要求する尺度に非ざるが故である。金其の他の如き最もよく取得し得る尺度は、時を異にし、場所を異にするに從つて、避け難き不正確に陷り勝ちである。（ibid., pp. 56-69.）。

價値を測定するの困難は富の測定にも亦適用せらるゝのみならず、相異れる時及び場所に於ける購入せらるゝ效

用と購入せられざる效用との變化しつゝある關係よりして他の困難は發生する。果して然らば、效用を以つて唯一の標準と認むるは一層簡單であり、又實に普通の思想と一層よく相容るゝものではあるまいか。斯くの如きはリカードオの見解である。然しながら、吾人が如何にして諸物件の種類を異にせる效用を比較す可きかを考察すると共に、吾人は直ちに斯くの如き見解の誤れるを知るのである。蓋し、諸物件の稀少若しくは夥多の程度と共に變化するは啻だに其の交換價値のみに非ずして、其の比較的效用若しくは使用價値も同樣の原因よりして變化すること明かなるが故である。洵に、ジェヴォンズが見事に說明せるが如く、相異れる物品の相對的市場價値に於ける變化は、斯くの如き物品の購入せらるゝ高の全部效用に非らずして、其の最後效用、換言すれば購入せらるゝ最後の部分の效用に關して一般人民によつて形成せらるゝ比較的見積に於ける變化を表明し、又之れに相應する。茶が低廉と爲つたが爲めにより貧しき階級によつて購入せらるゝとしたならば、吾人は彼れ等の購入する所のものは曩きに富者によつて購入せられたるより高價なる茶の如く有用に非ずと稱するは正當であらうか。洵に、貧民は奢侈品を有すること少なく、是れに由つて又、其の有する所のものよりして、より大なる享樂を取得するが故に、一定の貨物は貧民によつて購入せらるゝの時、より有用であると想像するは合理的ではあるまいか。加之、物質的物件の效用によつて、吾人は人間の必要及び願望を滿足する其の能力を意味し、而して吾人が是れ等の必要及び願望が不變であると看做す限り、人々は彼れ等が其の必要及び願望を滿足し得るに從つてより富裕であると稱するは容易であり、直截明快なるが如くではあるが、而も彼れ等の必要及び是れ等のものを滿足するの手段が歩を揃へて增加せる場合を取扱ふはさまで容易ではない。殊に、附加的必要が曩きには襲來の徵のなかつた或る苦痛又は危險に對する防護の必要であるならば、其の然るを見るのである。例へば、一國が洪水の新たなる危險に見舞はれ、而して其の住民の特別の努力によつて堤防が築かれたと想像するならば、吾人は其の國は從前よりも富裕なる國家と爲つたと稱す可きであるか。(ibid., pp. 70-78.)。

彼れに從へば、「貨物」なる語及び「勞働の產物」なる成語は物質的產物と等しく勤務をも亦包含するを得可きであるが、而も慣習は吾人を驅つて富なる名辭を比較的永續的なる效用の蓄積又は泉源たる物件に限定するの已むなきに至らしめる。而してそは是れ等の泉源より誘導せられ、若しくは何等物質的產物の媒介なく人間の勞働に依つて直接に供給せらるゝ暫時的效用と對置せられる。(ibid., p. 80.)。教養及び熟練も亦同樣に富と看做さるゝことがないゝ。(ibid., pp. 81-82.)。金錢債は交換の媒介物として使用せらるゝと雖も、富の中に包含せらるゝことを得ない。(ibid., pp. 82-85.)。吾人は一社會の富を見積るに際し、第一に消費者の富に携るが故に、生產者の富を消費者の其れより區別しなければならぬ。而して吾人は這般の差別を特許權、版權、得意先若しくは取引關係等が富であるか如何かの問題に適用しなければならぬ。(ibid., pp. 86-92.)。

シヂウィックは生產の理論が解答を與へんことを企圖する根本的問題を以つて(一)一定時に於ける一定社會の一人宛平均年產物をして其の主要欲望が實質的に相違することのない他のものゝ其れに比して大なるか、若しくは其の歷史的前段階に於ける其れ自身の產物に比して大ならしむる原因如何、並びに(二)其の作用の法則如何に存するものと觀る。(ibid., pp. 96-97.)。彼れは產物を以つて農工業者の產物と等しく運送人及び商人の勤務をも包含するものと解釋し、而して其の高に於ける變化は種々なる相異れる原因、即ち(一)人々の勞働の適用せらるゝ物質的環境の良否、(二)其の勞働の數量の大小、若しくは(三)其の品質の適否に歸せらるゝを得可きであると做してゐる。(ibid., p. 98.)。尙ほ、一定人口に依つて遂行せらるゝ勞働の外延的數量に於ける相違と等しく個人的勞働者又は

勞働者の集團の精力の程度に於ける相違を説明するに際しては、彼れ等の心中に現るゝ仕事に對する動機の强度の相違に主たる地位が與へられなければならぬ。(ibid., pp. 104-105.)。勞働の能率は勞作者の協同及び聯合、殊に仕事の分割により、又、發明により(其の發達は同時に協同の發達を助け、又、是れに由つて助けられる)、而して又發明の結果要求せらるゝこと大なる資本によつて著しく增加せられる。斯くて、彼れは是れ迄、經濟學者等に依つて勞働の能率に於ける增加の最も重要なる泉源と主張せらるゝの常であつた資本の蓄積に論入せんとするのであるが、不幸にして此の至要名辭は種々なる人々によつて區々に、又屢〻兩義に使用せらるゝが故に、彼れは其の論歩を進むるに先き立つて、資本の滿足なる定義を取得す可き系統的企圖に着手せんとする。(ibid., pp. 110-120.)。

曩きに定義せんことを試みたる「富」及び「價値」なる名辭は最完全なる意味に於いて普通の名辭であつた。然るに「資本」なる名辭は、科學的經濟學者が先づ之れを取り扱ふに至つた時には、既に半術語的名辭であつて、平素、人々に依つて概して其の通常の思考に使用せられずして、實業家及び其の他の者に依つて實業上の事項を論議するに際して使用せられて居つた。而して、實業家の見地より自然に此の名辭に與へらるゝ意義は經濟學者が之れに與ふるの常であつた意義と相違し、而して大多數の經濟的研究に取つては最便宜なるものではなかつた。實際家による其の本來の用法に於いては、「資本」は疑ひもなく「利潤を生ずるやうに使用せらるゝ富」を意味する。而して、這般の利潤が其の國内に於ける富の全存在高を增加するに由つて取得せらるゝと、勤務と交換して他人の富を領有するに由つて取得せらるゝとを問はないのである。然るに英國の經濟學者は、一國に於ける富の增加の諸原因を探求せるが故に、上記二種中の第一のものに彼れ等の資本の總念を制限し、斯くて又、之れを「生産に使用せらるゝ富」と定義するに至つたのである。(ibid., p. 121.)。個人的資本家の見地よりする資本、即ち「個人資本」は利潤を目的として使用せらるゝ富であつて、斯くて又、土地を包含するも、社會的見地よりする資本は主として人間の勞働を其の物質的環境に適用するの補助物として考察せらるゝが故に、吾人は斯くの如き環境其の者を其の原始的狀態に於いては除外するやうに此の名辭を定義しなければならぬ。(ibid., p. 126.)。「社會資本」は又、人間の勞働の結果に限定せらるゝも、而も、店の暖簾若しくは取引關係の如き勞働及び投費の非物質的結果たる可能的價格は當然其の店を所有する個人の富及び資本の一部として認められ、而して其の店の商品を購入するの習慣の確立が其の社會に取つて有用なる限り(單に有用なる限りに於いてのみ)吾人は又是れ等のものを社會資本の一部と看做すを得可きである。熟練其の他教育の結果たる材能は又、資本の項目中より排除せらる可きではないが、其の不可讓渡的特性を表現するが爲めに、寧ろ「人格的資本」と稱せらる可きものであらう。然しながら、體力が單に享樂若しくは生命支持の目的を以つてする消費より生ずる限り、そは資本中より排除せらる可きものである。勞働者の消費が正しく資本の投下と看做され得るは、唯りそが判然彼れの能率を增加するを目的として行はるゝ限りに於いてゞある。(ibid., pp. 126-131.)。蓄積せらるゝ資本は主として勞働者等の道具より成るものであつて、其の消費する食料、被服及び其の他の貨物より成るものではない。是れ等のものは勞働者の手中に在つては、最狹の意味に於いては資本ではないが、更らに廣き意味に於いては「消費者資本」と稱せらるゝを得可きである。將來の效用の豫期と等しく其の領有者に對して現在の享樂を與ふる富は「消費者資本」と名附けられ、單に向後享樂せらる可き産物の故を以つて價値あるに過ぎざる富は「生産者資本」と稱せられる。(ibid., pp. 132-138.)。

次いでシヂウィックは勞働のより大若しくはより小なる生産性の種々なる原因の作用する範圍に關して重要なる一般的命題を確立せんとする。彼れは這般の命題に「生産の諸法則」なる名辭を制限せんことを欲する。彼れは「生

産の諸法則」なる名辭によつて生産を決定する種々なる原因の一若しくは其れ以上のものに歸せしめらる可き結果の量に關する幾分確然たる知識を意味する。(ibid., p. 143.)。是れ等のものは概して何等の嚴密性を以つて設定せらるることを得ざるものである。(ibid., pp. 144-147.)。マルサスの人口法則及び土地收益遞減法則は正しく制限を加へらるゝ時は、傾向の抽象的叙述として妥當である。舊國に於いては、人口は生活資料を得るの困難に由つて限定せらるゝと做す具體的叙述も亦然るものである。然しながら、限界は硬直に非ずして、人民の習慣、安樂の可變的なる標準に依存する。(ibid., pp. 147-157.)。個人資本增加の法則は明確に確めらるゝを得ない。社會資本增加の法則に至つては一層然るものがある。縱令ひ、或る一定社會の個々の成員の貯藏の法則が、或る一定期間内に於いて、比較的精密に決定せらるゝことが出來たとしても、其の結果は該期間内に於ける其の社會の生産的資源の增加に關しては、何等正確なる響導を吾人に與ふることなかる可き種々なる理由が存する。(ibid., pp. 157-164.)。

五

シヂウィックは第二編に於いて分配及び交換の理論を考察する。彼れが是れ等理論の論述は元來ジョン・スチュアート・ミルの敎旨より出發するものである。然しながら、彼れは彼れがミルの學說を發見せるが儘に是れ等のものを殘すことがなかつた。彼れはミルの取れるあらゆる見解に對して明敏にして周到なる批判を加へ、あらゆる點に於いて修正と制限とを導入した。彼れの精神は極めて批判的であつて、洵に自己の結論に對する彼れの批判は其の構成的著述の製作を拘束するの傾向があつたと言はれてゐる。

彼れは「如何にして收益は生産に協同せる種々なる階級の間に配分せらるゝや」の問題を以つて「是れ等のものゝ勤務の交換價値を決定するは何であるか」の問題に變ぜられ得可きものと思惟した。斯くて分配の理論は事實是れ等勤務の交換價値の理論であつて、收益の配分の決定が慣習に由らずして自由契約に依つて行はるゝものと假定する時は、分配の理論は物質的産物の交換價値の理論と酷似するものである。是に於いて乎、彼れはミルに追隨して之れを物質的貨物の交換價値の理論より廣く切り離すことなきを以つて最上策と思惟したのである。(ibid., p. 177.)。

斯くて彼れは先づ物質的貨物の交換價値理論より始める。彼れはミルの成語に於ける「需要及び供給の方程式」は需要せらるゝ數量と等しく供給せらるゝ數量が價格と共に變ずるとすれば形式上價格を決定するに不完全なるものと考へる。(ibid., p. 190.)。一樣の生産費を有する商品の市場價値を說明するには、吾人は如何に供給が抑制に於ける得失の見通しに由つて決定せらるゝの傾向あるかを明かにしなければならぬ。(ibid., pp. 196-198.)。然しながら、「生産費」が、ケアンズの考ふるが如く、生産者によつて忍ばるゝ犧牲の名辭に於いて見積らるゝことなくして、ミルの見地に從ひ、報酬の名辭に於いて見積らるゝならば、そはあらゆる時に於いて需要から獨立せるものではない。(ibid., p. 202.)。斯くて、「價値は生産費に依存する」と做すミル及び其の他リカードオ學徒の價値學說は重要なる制限を要する。シヂウィックは競爭的に定まる自然價格に對する公式と之れに對應する市場價格に對する公式との間には、慥かにミルの語法に由つて不分明ならしめらるゝの傾向ある密接なる關係の存することを明かにする。市場價格(之れを完全なる市場に於いて存す可きが如く確定且つ單一のものと想像して)は當該産物に對する需要が現實の供給、將來の需要增大若しくは供給減少を見越して這般の供給の一部を撤回することある可きを認めて)を取り去るに充分なる大さを有する價格であると說明せられ、之れに對して、自然價格は同樣に、需要が、社會的及び産業的狀態に變化なしとすれば、永久的に其の價格に於いて生産せらる可きを期待せらるゝを得る供給を取り去るに充分なる大さを有す可き價格として決定せられる。實に、是れ等二個の場合に於ける決定者の間に劃さる可き何

等鮮明なる分界線も存することがない。生産費に於ける豫期せらるゝ變化は、其の結果が急速であり、著大であると期待せられ得るならば、あらゆる他の豫期せらるゝ供給若しくは需要の狀態と等しく、供給を通じて市場價格に影響する取引者の計算中に入る可きである。(ibid., pp. 210-211.)。コークスと石炭瓦斯の如く、同一の産業過程中に於いて二種若しくは其れ以上の産物が生産せらるゝ場合、又は羊肉と牛肉の如き、代用的關係に於いて存する物の場合には、價値の決定は一層複雜である。(ibid., pp. 211-213.)。

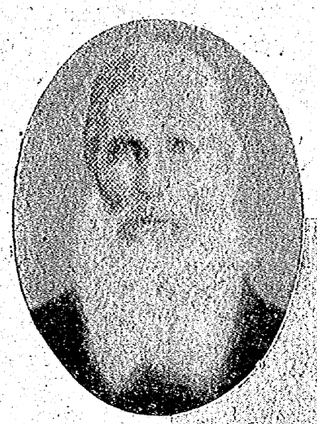
シヂウィックの『原論』中に在つて、最も獨創的なる部分の一は、彼れが之れに次いで表明せる國際價値の理論であると稱せられてゐる。ミル及びケアンズの意見に據れば、國際價値の理論的決定の特性は、生産費が輸入せらるゝ貨物の正常價値を決定するを妨げらるゝ相異れる國々の間に於ける勞働及び資本の不完全なる可動性に依存する。シヂウィックは斯くの如き意見に反對して、其の特性は寧ろ相異れる國々の間に於ける輸送費に依存することを主張する。彼れは、一の共通の産物が存するとしたならば、ミル及び其の亞流を汲める者の理論は崩潰す可きことを適切なる例證に照して論述する。即ち英吉利が西班牙の葡萄酒に對して織物を交換しつゝあるミルの擧げたる例を取つて、英吉利及び西班牙に於いて共に生産せらるゝ少くとも一の他の貨物、例へば、穀物が存すると想像するる。ミルの一般的價値理論に從へば、英吉利に於ける織物及び穀物の相對的價値は是れ等のものゝ比較的生産費によつて決定せられなければならぬ、而して又、西班牙に於ける葡萄酒及び穀物の相對的價値も同樣に決定せられなければならぬ。然しながら、吾人にして若し輸送費が排除せらるゝと想像するならば、葡萄酒若しくは織物の孰れかの價値が輸出によつて變ぜしめられなければならぬ理由は存することなく、斯くて、相對的に穀物に對する葡萄酒及び織物兩者の價値、是れに由つて又相對的に相互に對する其れは內國貨物の價値が決定せらるゝと等しく生産費によつて決定せられざるを得ない、縱令ひ、葡萄酒と織物とは其の夫々の費用に準じて相互に交換せらるゝことはないかも知れぬが。(ibid., pp. 217-218.)。斯くの如きシヂウィックの理論は一千八百九十四年エッヂワース教授(F. Y. Edgeworth)によつて Economic Journal. 誌上に於いて論評せられてゐる。(Edgeworth, Papers relating to Political Economy, vol. ii, 1925, pp. 28-31.)。シヂウィックは進んで、輸送費が最早排除せらるゝものと想像せらるゝことなき際には、問題が如何に變ぜしめらるゝやを明かにする。(Principles, pp. 222 ff.)。

彼れは次いで、貨幣の定義及び價値に就いて論じ、軈がて利子論に入り、利率を以つて、浮動資本の最後の增加量の使用によつて取得せらるゝと期待せらるゝ平均的附加的産物より「使用者(企業者)の手數料」と稱せられ得る所のもの、即ち資本の使用者が管理の勞働に對する其の報酬として保留す可き産物の部分を控除せるものに相應すると做した。(ibid., p. 286.)。

リカードオは「地代」なる名辭を「土壤の原始不滅の諸力」の使用に對して支拂はるゝ價格に制限する。然しながら、シヂウィックに取つては、斯くの如き定義に對しては重大なる反對論が存するの觀がある。第一に、其の標示する分界線は、具體的の場合に於いては、少くとも久しく耕作の行はれて來た國土に於いては何等正確に之れを劃することと不可能なるものである。而してリカードオ其の人の主張するが如く、地代が最も重要性を有するは這般の國土に於いてゞある。(ibid., p. 297.)。而も、縱令ひ、リカードオの定義中に含意せらるゝ歷史的學說が眞であるとしても、又、そが根本的のものとして提示する區別が具體的の事實に適用せらるゝことが出來るとしても、そは猶ほ地代の數量的決定の論議に於いては現存收益分配の要素としては殆んど適切ならざるものである。あらゆる一定時に於ける一農圃若しくは一農圃の用益の市場價格は如何にしても其の效用の究竟泉源に依存するものではな

い。這般の效用が土壤の本質又は人間社會の發達及び分配より生ずると、之れを產出するの目的を以つて費さるゝ勞働より生ずると、若しくは他の諸目的を以つて使用せらるゝ勞働より生ずるとを問はず、其の決定は全然同一なる可きである。(ibid., p. 299.)。然しながら、リカードオの公式は地代の競爭的決定に對しては、一定の制限を要するものではあるが、猶ほ妥當たるを失はない。(ibid., pp. 300-304.)。シヂウィックは又、幾分地代に類似する他の種々なる餘分の利潤の存することを認める。(ibid., pp. 307-308.)。

著者に從へば、競爭は勞働者に彼れの勞働をして最も有效ならしむるに要せらるゝ實質賃銀を與ふるの傾向あるものではない。彼れは又、一千八百六十九年にジョン・スチュアート・ミルによつて、「經濟學のあらゆる系統的論述中に看出さるゝことを推定せられた」賃銀基金說を承認するものでもない。賃銀は資本から支拂はるゝものと看做さる可きではない。然らば、單なる資本の高と勞働者の數との間の數字的比率の考察が其の決定に資することがないならば、正常なる期間內に、勞働に歸する收益の配分は如何にして競爭的に決定せらるゝか。先づ一般的賃銀、即ち總體に於いて考察せらるゝ勞働者等に歸する「一般的若しくは平均的配分は雇主の勞働の報酬をも包含するものと了解せらるゝが故に、土地をも包含せる資本の使用に對して支拂はるゝ總體の價格（斯くの如きものが普通の利子たると、あらゆる種類の獨占若しくは稀少に基く特別の支拂たるとを問はず）を控除せる後に殘存する收益の配分と看做さるゝを得可きものであつて、斯くて又、一部分は勞働の能率に、一部分は「生產者の富」の使用に對して支拂はるゝ價格に依存する。然しながら、一定國家內に於ける勞働者數の變化は、啻だに其の國の產業の一人宛平均收益の上のみならず、又、其の收益が勞働及び資本の間に配分せらるゝ割合の上にも亦重要なる影響を及ぼすの傾向がある。(ibid., pp. 310-324.)。次いで、著者は特殊賃銀及び利潤に就いて論ずる。(ibid., pp. 328-347.)。



THE PRINCIPLES
OF
POLITICAL ECONOMY

BY

HENRY SIDGWICK,
AUTHOR OF "THE METHODS OF ETHICS."

"In the day of the distinct
Work to weave and earn to grind;
Things are in the saddle,
And rule humankind."
EMERSON.

LONDON:
MACMILLAN AND CO.
1883.

[The Right of Translation is reserved.]

六

シヂウィックが、經濟の「學」に加へて、經濟の「術」を認めたことは前述の如くである。而して彼れは經濟術を以つて主として生産若しくは分配を改善するが爲めに、又、政治上の經費に備ふるが爲めに、政府によつて爲さる可き所のものより成ると述べてゐる。經濟術は又、分配の最高準則として提唱せられて來た正義若しくは衡平の原理を檢討し、而して經濟上の事項に關して私人の行爲を支配す可き原理を考察す可きである。彼れは、國民的生産の進歩が自利的動機によつて力強く且つ持續的に促進せらるゝことを認め、而して衝動力としても、又調整力としても、よく之れに代る可きものを看出すの困難が現在の個人主義的基礎以外のあらゆる基礎の上に社會を改造せんとするに際し、殆んど打ち勝ち難き障碍たることを說くと同時に、吾人は實際的政治家が接近せんことを求む可き典型を供給するものとして自然的自由の制度を承認する以前に於いて、重要なる一般的制限と其の樂觀的結論の許されざる特殊の場合を明確に認識するの必要を說くことを怠らなかつた。(ibid., p. 407.)。一定方針の行動の利害を公平に比較考量するに於いてシヂウィックは比類なきものであつた。而して是れ等實際問題に關する彼れの明敏なる論述の價値大なることは彼れの理論的經濟問題の論述を以つて全然其の嗜好に適せざるものと做す批評家によつても承認せられてゐる。アルフレッド・マーシャルは政府の適當なる職能に關する彼れの論議を以つて、あらゆる國語を以つて書かれたる此の種のもの〻中に在つて嶄然最良のものであると稱揚してゐる。

シヂウィックは偉大なるアルフレッド・マーシャルに對して多大なる影響を及ぼせるものであつた。マーシャルは一千九百年十一月十六日、ツリニチィ・ロッヂに於けるシヂウィック記念會に於いて述べて曰く、「彼れの名義上の弟子ではないが、余は實質上に於いては倫理科學に於ける彼れの弟子である。(中略)。余は彼れによつて形成せられた。彼れは、言はゞ、余の精神上の父母である。蓋し、余は當惑せる時には援助を得るが爲めに、又、困惱せる際には慰安を求むるが爲めに彼れの許に赴き、而して余は何等得る所なくして歸去したことは曾つて無かつたが故である。(中略)。而して、當然彼れの恩を感じなければならぬ總べての人々の中で、余以上の者は恐らくあるまい」と。(Momorials of Alfred Marshall, ed. by A. C. Pigou, 1925, p. 7.)。

シヂウィックの『原論』初版は菊判本文五百九十一頁より成るものであつて、一千八百八十七年に再版、一千九百〇一年に三版を出してゐる。本書は實に流布極めて多きものであり、其の初版本の如きも容易に之れを取得し得可きものであつて、敢て其の表題頁を寫眞版として掲ぐるの要を見ざるが如くであるが、唯だ從來の例に從ひ、著者の肖像と共に之れを載することゝした。